阿波野青畝著『掌俳話』Vol.12

34.
俳句は至って短い詩型である。単刀直入に直感を表現する。

切れ字を用いるなどして多くを語らない。

とにかくこんなことを並べて考えたならば、完全無欠の俳句は木に登って水を求める類であり、できるはずがない。

では俳句は何を求めるか？
未完成の美を求めるものである。完成ではない形において、更に完成しようとする可能性を高める。それは無限に向かう美の追求である。

幸いに日本人は連想力に優れている。一を知って十を悟る稟質（ひんしつ）を持つ。また日本の国語が不完成でもわれわれには通じ合う。これは短所を活かせれば長所となることで、短歌でも俳句でもこの方法を採って生かしている。

まどろっこしい説明は不愉快になる。物のひびきに応じる答えをよろこぶ。
日本人の特性として直感を貴び簡潔を好むからであろう。

35.
俳句会をさして、昔は連座と呼ばれていた。誰も連座と呼ばぬようになり、その語さえ知らぬようになったこのごろ、俳文学を研究する人の口から、座という言葉が出るようになってきた。

いったい座とは何か。座は連衆の意味である。気の合うグループの集まりが座に相当する。

座を最も必要とするのは連句を巻く場合である。独吟は自分一人でやれるが、連句の妙は数人が一座して応酬しあう、その雰囲気の楽しみは格別深い。こうしていると挨拶とか存問とかいって人同士の気持ちのつながりができて、自分のことにのみこだわる欠点をなくする。

現代の俳句は仮に悪く言うならば自我に偏し一から十まで個人主義に徹している。自分のことにさえ頭を労せばよいという癖がありそうである。

そこで私は昔の人が楽しんだように座の精神を甦らせてほしいと思う。ドライでは味気なさすぎる。人の心、物の心に血を通わせるべきである。

36.
「造化に随い造化に帰れ」という芭蕉の文章の中の言葉をよく考えてみたいと思います。

まず造化とは、万物を創造し化育した神、又は天地宇宙自然などのことを指すのでありましょう。

芭蕉は詩人として自然界を造化と呼んでそれに権威づけて造物主のはたらきを加味していたのではなかろうかと考えます。たやすく言えば、自然を尊び愛し愛される心がある。これが基本になっているのだと解しています。

俳句を作るものである吾々は、自然のあるがままに逆らわずにむしろ自然を尊重する精神になって随うならば、いろいろと自然が教え示してくれて吾々の感情を豊かに膨らませてくれます。

それには自然を向こう側の存在とせず、吾々の内側のものとしなくてはぴったり致しません。例えば松のことは松に習え、私意をもってはならぬ、と言われるのは自然と一致する努力が肝要ということなのです。

造花に帰れと言うことは私意を捨てて自然の豊かな懐の中に抱擁される。そういう気分を養えと奨めているのだと思います。

言うは易しく誠に難しい修行ですが。

2024.02.29